お父さんの赤飯

　照れくさいから、涙を隠すのに苦労したよ。だって、お父さんが突然来てくれたから。

「退院の荷物はあんまりないから、大丈夫」って何度も言ったのに、大きな荷物を抱えて一時間かけて、やって来たお父さん。

「フジで作ってもらった、ぬくぬくの赤飯ぞ」と言って、お父さんが手渡してくれた折箱の温かさがうれしくて、涙があふれてきました。

　そして、誰よりもわたしのことを思ってくれているお父さんの愛情が伝わってきました。「誰かが自分のことを思ってくれている」ということは、こんなにも人の心に響くものなんですね。

　お父さんは、荷物の中に、栄養をつけるための食品をいっぱい入れてくれていましたね。

　お昼に迎えに来てくれた夫といっしょに家に帰り、二人でお父さんの赤飯をいただきました。今もあの赤飯の温かさを思い出します。

（愛媛県48歳）鈴木久仁子